

## 訓註『読神社考辨疑』

鈴木 省 訓

### はじめに

日本には、古来よりあらゆるものに神を見出し、その「神」に対する信仰を持ち、我が国は「神国」であるという民族意識があったことは周知のことである。このような意識を持つ民衆の中に、外来宗教としての仏教が中国より伝来し、根づくまでに多くの工夫がなされたことであろう。

近世、特に江戸期には、神家と儒家とが手を取って仏教批判を行った。この仏教批判に対する対応は、近世仏教の大きな課題の一つであった。この課題は、禅宗の中でも、当然問題視され、批判に対する反駁の書が著われたのである。

臨済禅中興の祖、白隠慧鶴も例外になく、この儒者・神家の仏教批判に対し、反論の書を著わした。そして、「神」を臨済禅の中でどのよう位置づけるかを述べたのである。それが、『読神社考弁疑』である。

本年、日本仏教学会において、「神祇」という統一テーマで発表する場を得ることができた。そこで、臨済禅の神祇思想の考察の一資料として使用したのが、『読神社考弁疑』である。この資料の整理を兼ねて「訓註・読神社考弁疑」と題して、訓註を試みることにする。

### 凡 例

一、本稿は、『白隠全集』（昭和四十二年再版発行・龍吟社刊）第二巻収録、「読神社考弁疑」の訓註を試みたものである。ただし、読み方は、宝暦年間刊・版本を参考にした。

一、本文は、内容によって適当な段落を設け、各段落ごとに、原文を書き下した文を対照させ、語釈等の注を付した。

一、原文は原則として活字用正字を用い、特別な場合以外は当用漢字を用いた。

読神社考弁疑

『神社考弁疑を読む』

癸丑杪秋夜。禅余凭机睡。牧侍者袖一小冊来。曰。師常以羅山。為日域中興鴻儒文雅名臣。我輩非無少疑。昨過光嚴道場。有林氏書。持来以妨師春睡。看之。題曰神社考弁疑。

癸丑杪秋の夜、禅余机に凭りて睡る。牧侍者一冊を袖にし来る。曰く、師、常に羅山を以って、日域中興の鴻儒、文雅の名臣と為す。我輩、少疑無きに非ず。昨、光嚴道場を過く。林氏の書有り。持ち来って以って師の春睡を防ぐと。之を見る。題して『神社考弁疑』と曰う。

夫神社考。林氏選之。

夫れ神社考は、林氏、之を選して、弁疑は南

而弁疑。南紀雲石堂述之矣。予聞林氏美名多時。聞此書行亦久。於是及読三四枚。林氏優才。雲石博達。寔一時佳会也。正襟吟弄。拭目幽賞。如二客有高論同席而聞。直読至終卷。或驚或怪。且悲且恐。

紀の雲石堂、之を述す。予、林氏が美名を聞くこと多時、此の書の行なわるるを聞くことも亦た久し。是に於て三四枚を読むに及んで林氏が優才、雲石が博達、寔に一時の佳会なり。襟を正して吟弄し、目を拭って幽賞す。二客に高論有って席を同じくして聞くが如し。直に読んで卷の終るに至る。或は驚き、或は怪しみ、且つ悲しみ、且つ恐る。

初我以林氏。為文雅名臣。非無其端由。蓋其我日域雖粟散辺少之境。

初め、我れ林氏を以って文雅の名臣と為す。

其の端由無きに非ず。蓋し、其れ我が日域、粟散辺少の境と雖ども、宝祚の遠長、人物の

實祚遠長。人物高貴。

の高貴、殊方異域に勝ること遠し。況んや、

勝殊方異域遠。況繙田濃膏。台教碩德。密乘英豪。浄家淵才。禅門英伶。有律虎。有義竜。星列蕃布。出其賢聖何如此衆多哉。勝彼赤泉神州杳遠矣。云清浄神国乎。云円頓仏場乎。

繙田の濃膏なる。台教の碩德、密乗の英豪、浄家の淵才、禅門の英伶、律虎有り、義竜有り、星列、蕃布、其の賢聖を出だすこと、何ぞ、此の如く衆多なるや。彼の赤泉神州に勝ること杳かに遠し。清浄の神国と云わんか。円頓の仏場と云わんか。

予常謂。豈其縉徒而已哉。儒門亦必有其人。如林氏必其人矣。其尤者焉。

予、常に謂えらく、豈に縉徒のみならんや。儒門も亦た必ず其の人有らん。林氏の如き必ず其の人ならん。其の尤けき者ならんと。

今夜及読社考。平生心所以愛者俄然解。索爾卒至無悅。何計如此醜陋。如此強暴焉。是我所以大驚歎者也。悔昔日不見佗學術当否。不究言行精麤。妄輕許可焉。是又与林氏無窺仏教之淵奥不能究妙道之

今夜、『社考』を読むに及び、平生の心、愛する所以の者、俄然として解け、索爾として卒に悦ぶこと無きに至る。何ぞ計らん。此の如きの醜陋に。此の如く強暴ならんとは。是れ我れが大いに驚歎する所以の者なり。悔むらくは、昔日、佗の學術の当否を見ず。言行の精麤を究めず。妄りに輕ろうがしく許可せしことを。是れ又、林氏、仏教の淵奥を窺むること無く、妙道の玄微を究むること能わ

玄微妄攘斥者。一肩担　　ず、妄りに攘斥する者と。一肩に担取せば、取。担子亦可折而已。　　担子も亦た折るべきのみ。

癸丑　享保一八年（一七三三）　白隠四八才

杪秋　秋の末のころ

羅山　林羅山（一五八三～一六五七）儒学者。特に宋学を研究、藤原惺窩の門人。初めに建仁寺の僧であったが、後に、惺窩の門に入り、家康に仕え、秀忠に書を講じた。神儒一至論者であり、神社に対する仏教の習合を批判排斥し、理当心地神道という一派の神道を提唱し、神道人道一体、神人合一の理をとき、「王道神道理一也」と説いた。

鴻儒　大学者、大儒・洪儒ともいう。

雲石堂　寂本（一六三一～一七〇一）という。『弘法大師伝』の著者。号を雲石堂という。高野山にて出家。応盛、つづいて快慶の二師に仏教学を学ぶ。俗典にも精通していた。諸寺に住す。

佳会　すばらしい集り。

粟敢　粟粒のようにちらばった小さな国。粟散国の略。

殊方・異域　ともに外国のこと。

赤鼎神州　中国のこと。戦国時代の騶衍の説に基づいて、この名称が出た。

緇徒　僧のこと。

醜陋　心がけがいやすく、けがらわしいこと。

古原憲顔子俊秀且名利  
既抛去。声色既捨了。  
尚足破屋。安陋巷。道  
徳惟勤。

今称学士者纔読七五卷  
書冊。聞三四月壳講。

則妬火乍発。嫉焰俄熾。  
以排仏為急務。至彼正  
心誠意至教。如越人見  
楚人。間有老成士。口  
唱道徳仁義者。亦外伺  
候權勢門。蠱害妻孥愛。  
至彼孔夫子一貫孟軻氏  
浩然。終為無事甲上旧  
器。宜哉得其道稀。出  
其人難也。

責鳳鳴於鳶鶩。求豹斑  
於猪背者也。与擲富貴  
忘世縁毘尼其身。禅寂  
其心。谷飲巖栖専求無  
上妙道。精鍊苦修者。  
可竝駕而馳哉。

古、原憲、顔子の俊秀なる。且つ、名利既に  
抛ち去る。声色既に捨て了る。尚を破屋にて  
足れりとし、陋巷に安んじて道徳惟だ勤む。

今、学士と称する者、竊かに七五卷の書冊を  
読み、三四月の壳講を聞けば、則ち、妬火乍  
ち発し、嫉焰俄かに熾にして排仏を以って急  
務と為す。彼の正心誠意の至教に至って、越  
人の楚人を見るが如し。間々、老成の士有つ  
て、口に道徳、仁義を唱うる者も、亦た外  
に權勢の門に伺候し、妻孥の愛を蠱害せられ  
て、彼の孔夫子の一貫、孟軻氏の浩然に至つ  
ては、終に無事甲上の旧器と為す。宜なるか  
な。其の道を得ること稀に、其の人を出すこ  
と難し。

鳳鳴を鳶鶩に責めて、豹斑を猪背に求むる者  
なり。富貴を擲ち、世縁を忘じ、其の身を毘  
尼にし、其の心を禅寂にし、谷飲、巖栖、専  
ら無上の妙道を求めて、精鍊、苦修する者と  
駕を並べて馳す可けんや。

人各具高明智鑑。懷寥廓心珠。唯在琢磨功精麤如何而已。然則不慮其力不足其志不確。卻妬仏法盛大。惡德人高閑何哉。

古聖君賢輔佐皇化。恤生民者。則雖婦人小子語牧隸樵漁行。俱收竝蓄以備政治佐。只恐其聞晚得少矣。況十力調御三界慈父微妙遺教哉。王侯士庶蒙其益者知幾多矣。輕軋排之可哉。君子於人當於有過中求無過。詎可於無過中求有過。譏毀一無辜。雖得天下。而君子所不為也。況万邦歸仰法王三界無比大聖乎。

汝等羝羊眼狐狸智。妄謗辱而可得哉。此乃蜺

人、各の高明の智鑑を具し、寥廓たる心珠を懷く。唯だ琢磨の功、精麤、如何に在るのみ。然るに、則ち、其の力足らず。其の志確かならざることを慮づ。卻って、仏法の盛大を妬み、徳人の高閑を惡むとは何ぞや。

古、聖君、賢輔、皇化を佐け、生民を恤む者は、則ち、婦人、小子の語、牧隸、樵漁の行と雖ども、俱に収め、並べ畜へて以て政治の佐けに備う。只だ其の聞くこと晚く、得ること少からんことを恐る。況んや、十力の調御、三界の慈父、微妙の遺教をや。王侯、士庶、其の益を蒙むる者知んぬ。幾多ぞ。輕しく、之を軋排して可ならんや。君子、人に於て當に有過の中に於て、無過を求むべし。詎ぞ、無過の中に於て、有過を求むべし。一の辜無きを譏毀して、天下を得ると雖ども、而も君子の為さざる所なり。況んや、万邦歸仰の法王、三界無比の大聖をや。

汝等羝羊の眼、狐狸の智、妄りに謗辱するも、得べけんや。此れ乃ち、蜺蝦にして蒼海を妬

蝦而妬蒼海。蜺螭而寬碧虛者也。空勞力而已。動以三世因果理。強撥無為浮屠氏之妄談。嗟。江海可尽。因果理不能奪。目前昭昭者因果也。

左右明明者三世也。而不能自察。爲野狐誑惑。想夫仏於汝何害在。汝於仏何寬在。是余所以大怪者也。

原憲 孔子の弟子。字を子思と言う。清貧に安んじて道を楽しんだ人。  
顔子 紀元前五三〇前四八二。字は子淵。魯の人。孔子の弟子の中で最もすぐれ、德行第一にあげられ、三十二才で、師の孔子より先に死んだ。

陋巷 路地裏、貧民街。

妬火・嫉妬 ねたみ、にくしみの心の炎をもやすこと。

越人の楚人を見るが如し。越（春秋時代十二列国の一）は楚に滅ぼされた。うらむこと。

權勢 権力のある人。

伺候 ねらいうかがう。

妻孥 つまと子。

み、蜺螭にして碧虚を寬する者なり。空しく力を勞するのみ。動ずれば三世因果の理を以て、強いて撥無して、浮屠氏の妄談と爲す。嗟。江海は尽く可きも、因果の理は奪うこと能わず。目前昭々たる者は因果なり。左右明々たる者は三世なり。而るに自察すること能わず。野狐の爲に誑惑せらる。想うに、夫れ、仏の汝に於ける何の害か。在る。汝、仏に於ける何の寬か。在る。是れ、余の大いに怪しむ所以の者なり。

蠱害 そこないやぶる。

一貫 論語「吾道一以貫之」のこと。一つの方針で最後までつらぬく。

浩然 孟子「吾善養吾浩然之氣」のこと。天地間に充滿している至大至剛の氣。この氣が、人間に宿ると何物にも屈しない道德的勇氣となる。

無事甲上の旧器

毘尼 戒律

谷飲巖栖 隠者の生活のこと。

寥廓 からりとして広いこと。

賢輔 すぐれた大臣。

皇化 天子の徳行によって人を感化すること。

牧隸・樵漁 しもべ・きこりと漁夫。ともに身分のひくいものたえ。

舐排 押しつける。排斥する。

浮屠氏 仏教者。

且夫八宗始祖列嶽諸師。 且つ、夫れ八宗の祖始、列嶽の諸師。各の間  
各懷問世才。 智鑑日照。 世の才を懷いて、智鑑日照し、戒珠月潔し。  
戒珠月潔。 天神護之。 天神、之を護し、地祇、之を慎しむ。遺風  
地祇慎之。 遺風余烈。 余例、伝記載する所、口碑の銘する所。亮々  
傳記所載。 口碑所銘。 たり、昭々たり。而るに、汝一束に束ね来つ  
亮亮焉昭昭乎。 而汝一 て魍魎、天狗の部類と為す。予、読んで此に

束束来爲魍魎天狗之部類。予読到此。不覺傷  
涙下滿腮。其遠孫末流。千載下看此書者。誰不  
切齒恨汝。是仁人心哉。是君子志哉。

春汝執堯信狂言雲景妖夢。以為排仏先鋒。嗚呼。好箇名教老儒。何  
如此醜拙。汝所謂堯信雲景何為者哉。彼縱不  
狂不寢。無賴賤人語何足取。況狂言哉。況睡  
夢矣。古来曉事物無実。以夢幻空華為譬喻。今  
欲破実徳純善諸老。恃無実狂夢而主張。是豈  
大丈夫志氣歟。夫狂者。不祥大者也。夢者。不  
信甚者也。若其不祥狂言為珍。不信睡夢為美。  
其人必狂人乎。其人必

到って、覚えず傷涙下つて腮に満つ。其の遠孫、末流、千載の下、此の書を見る者、誰か齒を切つて、汝を恨まざらん。是れ仁人の心ならんや。是れ君子の志ならんや。

春、汝と堯信か狂言、雲景か妖夢を執つて以つて排仏の先鋒と為す。嗚呼、好箇の名教、老儒、何ぞ此の如く醜拙なる。汝が所謂、堯信、雲景は何為れの者ぞや。彼、縱い狂せず、寢せざれども、無賴の賤人の語、何ぞ取るに足らん。況んや、狂言なるをや。況んや、睡夢なるをや。古来、事物の無実を曉すに、夢幻、空華を以つて譬喻と為す。今、実徳純善の諸老を破らんと欲して無実の狂夢を恃んで主張す。是れ、豈に大丈夫の志氣ならんや。夫れ、狂は、不祥大なる者なり。夢は、不信甚しき者なり。若し、其れ不祥の狂言を珍と為し、不信の睡夢を美と為すは、其の人、必ず狂人ならんか。其の人、必ず夢中の人ならんか。

夢中人乎。汝輩常以死後斷滅為懷。今又俄以死後異生為論者何哉。何言之混亂矣。寔可笑而已。宜哉。

雲石老人唾手点檢矣。嗟。君子所慎者言行也。衆聖所誠者口業也。古有金色鬼。猪頭口出臭虫数万。衆苦不可演。

仏言。是清淨持戒比丘為不慎口業故。今受此苦報。又有一比丘。為維那時。因罵老比丘。為多劫墮泥犁。最後生旃陀羅家。受賤小鄙醜形。田夫罵比丘。乍受毒竜身。老婦出麤言。雷震殺之。微妙比丘尼口業。善星比丘口過。慧眺受苦。宋尉醜報。不暇尽枚挙。吾聞之。作五無

汝輩、常に、死後の斷滅を以て懷と為す。今、又、俄かに死後の異生を以て論を為す者は何ぞや。何ぞ言の混亂せる。寔に笑うべきのみ。宜なるかな。

雲石老人、手に唾して点検すること。嗟、君子慎しむ所の者は言行なり。衆聖、誠むる所の者は口業なり。古、金色の鬼有り。猪頭に於て、口臭く、虫を出すこと数万。衆苦演ぶるべからず。

仏言く「是れ清淨持戒の比丘、口業を慎しまざるが為の故に、今、此の苦報を受く。」と。又一比丘有り。維那と為す時に、老比丘を罵るに因つて、多劫、泥犁に墮す。最後、旃陀羅の家に生まれ、賤小鄙醜の形を受く。田夫、比丘を罵つて、乍ち毒竜の身を受け、老婦、麤言を出して、雷之を震殺す。微妙比丘尼の口業、善星比丘の口過、慧眺が受苦、宋尉が醜報、尽く枚挙するに暇あらず。吾れ、之を聞くに五無間の業を作る者は、一聰明の凡夫なりと。

若し、諸君の高談の如きんば、人死して後、

間業者。一聰明凡夫也。若如諸君高談。人死後魂飛魄散。寥而全不留纖塵。則止矣。若又果然有泉府。有冥官。則罪簿無地隱。口過無暇掩。然則叫喚泥犁苦聚可恐。今日高談雄弁必作來生悲泣号叫。是我為諸君。所以大悲傷者也。

古張公無尽見仏閣嚴麗僧舍高広。妬忌竊起。欲作無仏論以摧之。依賢婦諫。見浄名經一返。妬火俄消。謗焰乍滅。終作護法高論。寔千載美談也。官到宰臣。壽過八旬。作法城金湯也。哲人改過不吝。可見。与排仏輩身陷坎軻。貽笑於千載者可同日而語

魂飛び、魄散ず。寥として全く纖塵を留めずんば、則ち止む。若し、又、果然として泉府有り。冥官有らば則ち罪簿、隱に地無く、口過掩うに暇無し。然らば、則ち叫喚泥犁の苦聚恐るべし。今日の高談雄弁、必ず來生の悲泣号叫と作さん。是れ我れ諸君をして為に、大いに悲傷する所以の者なり。

古、張公、無尽仏閣の嚴麗、僧舍の高広を見て、妬忌竊に起り、『無仏論』を作つて以て之を推んと欲す。賢婦の諫に依つて『浄名經』を見ること一返、妬火、俄かに消し、謗焰、乍ち滅して、終に『護法高論』を作る。寔に千載の美談なり。官、宰臣に到り、壽八旬を過ぎ、法城の金湯と作るなり。哲人、過を改めて吝しまざること。見るべし、排仏の輩、身、坎軻に陥りまり、笑いを千載に貽す者と、日を同じくして語可けんや。人、各の一霊の真性を具す。彼、豈に因果の目前に

哉。人各具一靈真性。

昭々たるを知ること能わざらんや。

彼豈不能知因果昭昭於

目前。

八宗 華嚴宗、律宗、法相宗、三論宗、成実宗、俱舍宗、天台宗、真言宗。

齒を切つて 齒をくいしばる。はげしくいかるさま。

堯信 人名

雲景 人名

雲石老人 寂本のこと。

手に唾して きわめて容易なたとえ。

維那 修行僧の指導者。

泥犁 地獄のこと。

旃陀羅 四姓外の賤民。

鄙醜 いやしくみにくいこと。

田夫 いなかもの。農夫。

微妙比丘尼 自身の世苦のために出家し、聖果を得たる経歴をとき、五

百の比丘尼を度した。

善星比丘 『涅槃經』では釈尊の子として、一闍提の好例としてあげて

いる。彼は、仏なく、法なく、涅槃なしという悪邪見を生じ、悪

心のため、生きながら阿鼻地獄に堕したとされている。

慧眺 人名

宋尉 人名

五無門の業 無間地獄に墮ちる五つの悪業（五逆罪）。八大地獄の第八

阿鼻地獄のこと。

聰明 道理に明るいこと。

泉府 民間の物価の調節をつかさどるところ。

冥官 冥土の役人

張公 張商英（一四三―一二二）字は天覺。諡は文忠。無居士と号

す。十九才で科擧に応じ、上級官吏として重職の任にあった。大  
觀四年に宰相となったが、政策の失敗により左遷されたが、後に  
復歸し再び宰相となる。蘇軾とも交渉があった。多くの禪僧とも  
交わり、圓悟克勤とは密接な関係があった。世寿七十九。

護法高論 張商英著、一卷。儒者の排仏論に対し、儒仏二教の典籍に基

づいて反駁し、かねて王浮の『化胡經』の偽作なる事を論じ、更  
に王文庫の『大同論』等を引いて、三教の調和論を提唱し、極力  
排仏思想を一掃しようとした論著。

金湯 金城湯池のこと。まもりのかたい城。

坎軻 世の中に受け入れられないさま。不遇で志を得ないさま。

人各有四智正因。彼豈 人、各の四智の正因有り。彼、豈に三世の左

不能察三世明於左右。 右に明々たるを察すること能わざらんや。明

明極至教。顯佐政治。 らかに至教を極め、顯らかに政治を佐け、刑

省刑法。密及幽冥。摧 法を省き、密に、幽冥に及び、苦輪を摧くこ

苦輪。錫堯者知。雉兔 と、錫堯の者を知り、雉免の者も知る。彼

者知。彼豈不信之。唯起一念妬忌。計暫時利達。強力謗排矣。

原夫排仏病遠起乎韓氏。熾乎朱子。余毒流及林氏者也。蓋有病源。甚隱微而漏越人華陀神鑑。如空谷尚理鐔津輔教商英護法天樂金湯。雖方書各究其神。終不能拔其本根。吾能知病因所根蟠。邪氣所屈托。非膏非育。見微不失毫芒。蓋試論之。自仏日照寔区以來。釈梵常帰仰。竜天鎮保護。王侯戴足。士庶傾心。称其徒者。世縁不掛懷。塵務無役形。四種清供無乏。三学真修無怠。道果内秋収。戒光外淵発。涌楼飛殿極宇宙壯観。準繩

豈に之を信ぜざらんや。唯だ、一念の妬忌を起し、暫時の利達を計って、強力して謗排す。

原夫、排仏の病、遠く、韓氏に起きて、朱子に熾んに、余毒流れて林氏に及ぶ者なり。蓋し病源有り。甚だ隱微にして、越人、華陀が神鑑に漏れ、空谷の尚理、鐔津の輔教、商英の護法、天樂の金湯の如き、方書、各の其の神を究めんと雖ども、終に其の本根を抜くこと能わず。吾れ、能く病因の根蟠する所、邪氣の屈托する所を知り、膏に非ず、育に非ず。見微毫芒を失せず。

蓋し、試みに之を論ず。仏日照寔区を照して自り以來、釈梵、常に帰仰し、竜天、鎮に保護し、王侯、足を戴き、士庶心を傾く。其の徒と称する者、世縁、懷に掛けず。塵務、形を役すること無くして、四種の清供、乏しきこと無く、三学の真修怠ること無し。道果、内に秋収し、戒光、外に淵発す。涌楼、飛殿、宇宙の壯観を極めて、準繩の規矩、人夫の高貴を尽し、人主も臣と称すること能わず。考妣も子と称すること能わず。純善の至教、大い

規矩尽人天高貴。人主不能称臣。考妣不能称子。純善至教。大扶生

民。定慧勲果。密及神鬼。親握法王印。誠為人中宝。

見世称儒生者。侵苦寒。忘煩暑。舌耕教授而終歳。努力竟不能飽十口家。

偶有爵禄展眉褒賞得志者。穀石終無過一百。韓愈屈強。且歎曰。冬暖。而兒号寒。年登。而妻啼飢。況其余碌碌者哉。於是妬火竊起。

謗又俄磨。自謂願上天勳力。人君同心。摧擲仏像。焚棄經卷。謗殺其人。譏敗其居。剝落其田園。竝吞其山林。興列庠序。張宏学費。

に生民を扶け、定慧の勲果、密に神鬼に及ぶ。親しく法王の印を握り、誠に人中の宝と爲る。

世の儒生と称する者を見るに、苦寒を侵し、煩暑を忘れて、舌耕し、教授して歳を終う。努力して、竟に十口の家を飽きしむること能わず。

偶、爵禄、眉を展べ、褒賞、志を得る者有るも、穀石、終に一百に過ぐるること無し。韓愈が屈強なるも、且つ歎じて曰く、冬暖なれども、兒は寒たりと号び、年登れども、妻は飢えたりと啼く。況んや、其の余の碌々たる者をや。

是に於て、妬火、竊に起り、謗又、俄かに磨して自ら謂えり。願わくは、上天力を勸せ、人君心を同じて、仏像を摧擲し、経巻を焚棄し、其の人を謗殺し、其の居を譏敗し、其の田園を剝落し、其の山林を並吞し、庠序を興列し、学費を張宏にせんことを。



寥々宇宙間。儒教独行。則其功齊大禹。其勲同益稷。當此時。恣尊貴於人世。佞榮耀於兒孫者。非吾輩而其誰哉。所恨。瞿曇夷狄德。廓於日月。浮屠異端行潔於冰雪。譬如猪忌金山。如何弥磨弥朗。転触転輝焉。是故心憤憤不快。口悱悱不樂。心火熠熠。老死而休者也。

寥々たる宇宙の間、儒教、独り行えば、則ち、其の功、大禹に齊しく、其の勲、益稷に同じからん。此の時に當って、尊貴を人世に恣にし、榮耀を兒孫に伝えん者は、吾輩に非ずして、其れ誰ぞや。恨む所は、瞿曇夷狄の德、日月より廓に、浮屠、異端の行、冰雪より潔きことをと。譬えば、猪の金山を忌むが如し。如何せん、弥磨すれば、弥朗らか。転た触れば、転た輝くことを。是の故に、心憤々として快ならず。口悱々として樂しまず。心火熠熠として老死して休する者なり。

四物者。庸才懦弱之士。んや、上天、之を賦し、神鬼、之を惜むをや。不易得者也。況上天賦之。神鬼惜之哉。

人若有道德仁義。天豈人、若し、道德仁義有れば、天、豈に之を棄之哉。刻剝善人。譏てんや。善人を刻剝し、高德を譏疵し、身を疵高德。終身不知本於終えるまで、己に本づくことを知らず。大己。非大失計者哉。に、計を失する者に非ずや。

四智 四種の智。大円鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智。

正因 仏果を得る因になること。

芻蕘 いやしい身分の人。

雉免 まじとうさぎ。またそれをとらえる獵師。

韓氏 韓愈（七六八〜八二四）中唐の文豪。唐宋八大家のひとり。柳宗元とともに古文復興に努力した。

朱子 朱熹（一一三〇〜一二〇〇）南宋の儒学者。字は元晦、または仲晦。号は晦庵。經書の注釈を多く著わす。

隱微 人の氣付かない微妙なところ。

華陀 二世紀末から三世紀頃、後漢末期の医者。

空谷尚理 空谷景隆著、『尚理篇』一卷。天如惟則の法嗣、空谷景隆が、道士繆尚誠の「神化図」を駁破したもの。儒道二教の排仏説の非を認め、道を以って教と為し、善を以って勸と為す三教聖人の道に順うべき旨を論じている。しかし、これは空谷の権説であつて、本旨は他にあるという。『尚直篇』と姉妹篇をなしている。

鐔津輔教 仏日契嵩著『輔教編』六卷（一〇〇〇～一〇七二）契嵩は、藤

州、鐔津の人。宋代における儒仏道三教の並存不廃説の代表作の一。仏教の五戒十善説と、儒道二教の五常説とを比較論述し、三教はその所立を異にしているが、その主張は結局、帰一調和すべきものであることを論じている。

商笑護法 前述、張氏、及び護法高論を見よ。

天樂金湯 岱宗心泰編（一三二七～一四一五）の『仏法金湯篇』。仏法の護法史で、周の昭王以後、元の順宗に至るまでの歴代君主、宰官、名儒等で、仏法に帰依し、護持した人三九八人の伝をまとめたもの。編者、心泰は、臨済宗楊岐派大慧派に属す。一四〇八年、寂照庵に退去。一四一二年、請を受けて永樂に帰るとその伝にある。天樂は、永樂ではないか。

根蟠 こまかく根のようにまがりくねっているようす。

屏才 よせちじまること。

膏に非ず盲に非ず 膏、盲の間は、治療しにくい部分。転じて、物事のしにくいたとえ。

毫芒 ごく微細なもの。

寰区 天子の治める土地全体。天下。寰宇・寰内とも。

釈梵 帝釈天と梵天。仏法の守護神。

竜天 仏法を守護する神々。

塵務 世の中のうるさい務め。俗務ともいう。

準繩の規矩 規矩準繩の語、孟子の中にあり。行為や事物の標準・法

則。てほん。

勲果 自分の力で得た結果。

舌耕 講義・演説・講演などによって生計の道をたてること。

爵祿 爵位とそれに相当する禄高。

眉を展べ 心配ごとがなくなる。

褒賞 ほめて賞する。

志を得る 自分の志を行うことができる。

屈強 意志が強く、人に属しないこと。

碌々 平凡なさま。

庠序 中国古代の学校のこと。

大禹 大禹惜寸陰、夏の禹王はわずかな時間もおしんで努力した。大禹は禹王の美称。

益稷 稷下の学、戦国時代、斉の宣王は学者を優遇したので、天下の学者が集まり、学問が栄えたこと。

瞿曇 仏・仏教

夷狄 中国周遍の異民族の総称。

猪の金山を忌む

憤々 心がおだやかでないさま

悻々 口に出そうとしても口から出てこないようす。

晦菴 朱熹の号

譚語 たわごと。

刻剝 虐げそこなうこと。

識疵 悪口をいって人をきづつけること。

近世有神家者流。不知神理如何。不察仏乗如何。乱自効歩於寒儒徒。以排仏為急務。蓋夫仏者。三世貫通大聖也。神亦三世洞明。与仏無異。是内秘同体故。独孔子不說三世。是故諸儒常疑之。譬有一瞽者。為其父不說教日月明。終身以日月為妄談。為誑惑。將是為智乎。將是為不智乎。

今背洞明神智。与暗小凡愚。寔可惜矣。惟仏身周遍法界。劫火烧不及。毘嵐吹不入。粲乎事物表裏。煥乎群有心上。讚之無増。謗之無減。豈恐庸流妬忌。所

近世、神家の者流有り。神理の如何んを知らず。仏乗の如何を察せず。乱らに、自ら寒儒の徒に効いて、排仏を以って急務と為す。蓋し、夫れ、仏は三世貫通の大聖なり。神も亦た、三世洞明の仏と異なること無し。是れ内秘同体の故に。独り孔子のみ三世を説かず。是の故に、諸儒、常に之を疑う。譬えば、一瞽者有り。其の父、説いて日月の明を教えざるが為に、身を終るまで、日月を以って妄談と為さんか。誑惑と為さんか。將た、是れ智と為さんか。將た、是れ不智と為さんか。

今、洞明の神智に背き、暗小の凡愚に与みす。寔に惜しむべし。惟だ、仏身法界に周遍して、劫火烧けども及ばず。毘嵐吹けども入らず。事物の表裏に粲乎として、群有の心上に煥乎たり。之を讚すれども増すこと無く、之を謗れども減すること無し。豈に、庸流の妬忌を恐れんや。悲しむ所は、諸君の智眼高

悲。諸君智眼不高明。識見不遠大。執寡陋小見。常添阿鼻泥犁熾焰。或教壞朴実純善男女。古豊聡皇子法道神仙丞相菅公役氏小角聖明神智通顯徹冥。非凡愚可測。且神仏並信。瞻礼無怠矣。

原夫神明不忌仏乗。増加於伊勢。解脫於八幡。明慧於春日。泰澄於白山。行基於白鬚。桓舜於日吉。常觀於吉野。性蓮於熱田。典籍所載。何不見之。独信堯信雲景狂夢。為知哉。是豈達人量陂才士淵識歟。若好信狂言者。何不信南都瑋円春日神異。若好信睡夢。何不信証真十禪師示現三井焰燒日

明ならず。識見遠大ならず。寡陋の小見到執して、常に、阿鼻泥犁の熾焰を添え、或は、朴実純善の男女を教壞す。

古え、豊聡皇子、法道神仙、丞相菅公、役氏小角、聖明神智、顯らかに通じ、冥に徹して、凡愚の測るべきに非ず。且つ神仏並べ信じ、瞻礼怠ること無し。

原夫、神明、仏乗を忌まわざること、増賀の伊勢における、解脫の八幡における、明慧の春日における、泰澄の白山における、行基の白鬚における、桓舜の日吉における、常觀の吉野における、性蓮の熱田における、典籍の載する所、何んぞ之を見ざる。独り、堯信、雲景が狂夢を信じて知となるや。是れ、豈に達人の量陂、才士の淵識ならんや。若し、好んで狂言を信ぜば、何んぞ、南都の瑋円、春日の神異を信ぜざるや。若し、好で睡夢を信ぜば、何んぞ証真、十禪師の示現、三井、焰燒の日、赤山、寺僧に示すを信ぜざるや。

赤山示寺僧乎。

顧夫我六十州扶桑。有八万区鎮座。各抱高明德。靈驗妙応如在。仏法入日域以来千有余歳。豈八万軀仏像哉。豈千万軸梵経哉。非是本迹真身不二神仏水波同体者乎。神若為有害国家不利生民。豈容片木仏像。豈留半片梵経。土是神之国也。人是神之民也。何有所慎坐見之哉。若為神初不知之。是暗神者也。若為雖神忌不能制之。蔑神者也。且道雖神忌不能拒之。千載下待汝輩備以妬害之乎。寔可笑矣。嗟。欲敗佗人達己身者。乱臣賊士心也。何日有足。百乘而竊窺千乘家。必

顧みるに、夫れ我が六十州の扶桑八万区の鎮座有り。各の高明の徳を抱いて、靈驗妙応在すが如し。仏法、日域に入りてより以来、千有余歳。豈に、八万軀の仏像のみならんや。豈に、千万軸の梵経のみならんや。是れ本迹真身、不二神仏、水波同体なる者に非ずや。神、若し、国家に害有つて、生民に利あらずと為さば、豈に、片木の仏像を容れんや。豈に、半片の梵経を留めんや。土は是れ神の国なり。人は是れ神の民なり。何んぞ、慎しむ所有つて、坐から之を見んや。若し、神、初めより、之を知らずと為さば、是れ神を暗する者なり。若し、神を忌むと雖ども、之を制すること能わずと為さば、神を蔑する者なり。且つ、神忌むと雖ども、之を拒むこと能わず。千載の下、汝輩を待つて、備つて以つて之を妬害すと道わば、寔に笑うべし。嗟、佗人を敗つて、己身を達せんと欲する者は、乱臣賊士の心なり。何れの日か足ること有らん。百乘にして、窃に、千乗の家を窮めること必ず晩からず。

不晩。

内密同体 表にあらわれない秘められたところで一体である。  
譬 めくら

毘嵐 毘嵐風のこと。大暴風。劫来・劫初に吹き、速力が迅速で、いたるところ、ことごとく破壊する暴風。

煥乎 光り輝くさま。りっぱなさま。

豊聡皇子 聖徳太子のこと。一度に八人のことばを聞きわけたことにより、「豊聡」という。

法道神仙 奈良朝初期の仙人。印度に生まれ、中国、百済を経て我が国に來り、播磨・南郡・法華山に住し、常に法華を誦し、密觀を修した。宮中にて靈驗を示した。

丘相菅公 菅原道真（八四五～九〇三）平安朝時代の政治家。また、儒学の巨頭、我が国における文字の神と仰がれ、教育の祖と見られている偉人。太宰府に左遷される。信仰は仏教であり、特に天台の信仰で、深く觀音を念じていた。死後、靈を祀ったが、太宰府天満宮である。

役氏小角（六三四） 幼にして既に生駒、熊野の両山に攀じ、三十二歳、葛城山に登り、三十年間穴居し、山を出ず、常に木食して孔雀明王の神呪を唱え、奇異の驗術を得た。小角の足跡は多くのこされている。神變大菩薩の諡号あり。

増賀（九一七～一〇〇三） 母に「汝の心は菩提に在らずして利名に在るを知る。是の如くならば、父母還つて共に地獄の滓と為らん」

と言われ、増賀は発奮し、帰山し、根本中堂で千夜を限り、毎夜千礼して道心の発起を祈願し、ついで、伊勢太神宮に詣で祈願し、名利を捨てるべきの神告をうけたという。

#### 解脱

(一一五五～一二二三) 本朝高僧伝卷十三には、「慶、詣春日祠」とあり、贊には、「世之不<sub>レ</sub>名称<sub>二</sub>解脱上人<sub>一</sub>者。千載不磨之口碑也。使<sub>レ</sub>遠<sub>二</sub>想高潔之儀操<sub>一</sub>。是以春日明神。屢現<sub>二</sub>影於般若台<sub>一</sub>。問<sub>レ</sub>法受<sub>レ</sub>戒。誠協<sub>二</sub>于神人<sub>一</sub>之徳也哉。」とあり、春日明神の利益がのべられている。法相宗の高僧。貞慶のこと。

#### 明慧

高弁(一一六三～一二二二)華嚴、教学等を学ぶ。「元久二年、春、与<sub>二</sub>同志<sub>一</sub>欲<sub>二</sub>從<sub>二</sub>真丹<sub>一</sub>達<sub>二</sub>於天竺<sub>一</sub>。裏粮已備。屢疾不<sub>レ</sub>果。知<sub>二</sub>春日神尼<sub>一</sub>其遠遊。而遂止焉」と『本朝高僧伝』卷十四にある。また、華嚴の経疏を披覽し、屢靈驗を感じたともある。

#### 泰澄

(六八三～七六七) 加賀白山の僧。越の大徳といわれていた。弟子等と白山に登り、妙理菩薩を感じす。『本朝高僧伝』卷四十六には、泰澄が白山における靈驗をあげている。また、『本朝神仙伝』にくわしいことが記載されていると述べられている。

#### 行基

(六七〇～七四九) 法相宗。法相の教学を学ぶ。天皇が東大寺建立の願を発すや、勅を奉じ、伊勢大神宮にもうで、神託を請う。その他、靈異神驗が、その伝に多くのべられている。

#### 桓舜

(九七八～一〇五七) 天台宗、平安朝時代、叡山四傑の一。「遊<sub>二</sub>化豆州<sub>一</sub>。詣<sub>二</sub>温泉神祠<sub>一</sub>。七日說法。夢神告曰。師早帰山。必昇顯位。云云」「舜詣<sub>二</sub>山王明神<sub>一</sub>祈福。経<sub>レ</sub>年無<sub>レ</sub>応。祈<sub>二</sub>稻荷神<sub>一</sub>。

#### 常観

第七夜夢神女出<sub>レ</sub>殿、云云」とあり靈驗をあげている。

(生没不明) 真言宗

「嘗詣<sub>二</sub>吉野神祠<sub>一</sub>。路見<sub>二</sub>兒輩三人聚泣<sub>一</sub>。(中略) 試赴<sub>二</sub>吉野<sub>一</sub>。身健無崇。尚慎<sub>二</sub>穢事<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>近<sub>二</sub>神殿<sub>一</sub>。依<sub>二</sub>大樹下<sub>一</sub>。誦經默禱。時巫奏<sub>レ</sub>樂。狂走喚<sub>レ</sub>観曰。待<sub>レ</sub>公者久。何来晏。我無<sub>二</sub>忌嫌<sub>一</sub>。只貴<sub>二</sub>慈心<sub>一</sub>耳。相延入<sub>レ</sub>殿。因問<sub>二</sub>法理<sub>一</sub>。神答如<sub>レ</sub>流。往復唱酬。観不<sub>レ</sub>忍<sub>二</sub>拝辞<sub>一</sub>。(本朝高僧伝卷五十三)とあり、吉野の神祠の靈驗をあげている。

#### 性蓮

(生没不明)「蓮慈孝。負<sub>二</sub>母骨<sub>一</sub>赴<sub>二</sub>高野<sub>一</sub>。路次<sub>二</sub>尾州熱田<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>神忌<sub>一</sub>穢。不<sub>二</sub>敢入<sub>一</sub>社。宿<sub>二</sub>南門側<sub>一</sub>。登夜大祝夢。神告曰。我有<sub>二</sub>高賓<sub>一</sub>。汝等宜<sub>二</sub>致<sub>二</sub>珍饗<sub>一</sub>。詰朝大祝使<sub>二</sub>人巡檢<sub>一</sub>。蓮在<sub>二</sub>門側<sub>一</sub>。大祝敬請。蓮告<sub>二</sub>忌諱<sub>一</sub>。大祝曰。我夢蒙<sub>二</sub>神饗<sub>一</sub>師。乃供<sub>二</sub>盛饌<sub>一</sub>送到<sub>二</sub>紀州<sub>一</sub>。」(本朝高僧伝、卷五十三)にあり、熱田宮は、孝礼を知る神としてあがめられている。

#### 堯信

人名

#### 雲景

人名

#### 量陂

たぐさんのものをとどめておく。

#### 淵識

深い見識。

#### 扶桑

日本

今神家者と儒人。如漢 今、神家の者、儒人に与すること、漢家の莽家愛莽魏室寵達。寔可 を愛し、魏室の達を寵するが如し。寔に恐る

恐。若夫儒人束排仏志。

べし。

安道德仁義上。神家亦収排仏志。究神理玄奥。惟德日高。垂法於後昆。貽祥於兒孫。豈不快哉。

若し、夫れ儒人、排仏の志を束ねて、道德仁義の上に安んじ、神家も亦た、排仏の志を収めて、神理の玄奥を究めば、惟だ、徳日に高め、法を後見に垂れ、祥を兒孫に貽さん。豈に、快ならざらんや。何んぞ、煩わしく、婦

婢妾之妬害哉。胡為其賤矣。儒仏於神明。其同異親疎。先有神官尚舍者。詳判之。哲人一

姑の狼戾を懷き、婢妾の妬害を貯えんや。胡為れど、其れ賤しきかな。儒仏の神明に於ける其の同異、親疎、先に、神官尚舎の者有り。詳らかに之を判ず。哲人の一言、寔に天

言。寔天下公論者也。吾足之。何煩言之哉。

下の公論なる者なり。吾れ、之を足れりとす。何んぞ、煩わしく、之を言わん。

顧夫浮図氏亦宜自計保護之。荷担真乘。鎮護法城者。浮図之任也。

顧るに、夫れ浮図氏も亦た、宜しく、自ら計つて之を保護す。真乗を荷担し、法城を鎮護するは、浮図の任なり。法門の盛大に誇り、

而誇法門盛大。恃国恩寬厚。耽著兒戲文章。吟弄薄技詩偈。如長安

国恩の寬厚を恃して、兒戲の文章に耽著し、薄技の詩偈を吟弄して、長安の豪家、富人の子弟の輕肥を恣にし、梅柳を玩んで、礼法、

豪家富人子弟恣輕肥。玩華柳。礼法未曾修。資産未曾顧。而称三界慈父兒孫。受十方檀信

未だ曾って修せず、資産、未だ曾って顧るにあらざるが如し。而して、三界の慈父の兒孫と称し、十方檀信の財施を受けて可ならんや。叢社、秋深く、法苑、霜寒し。声色は、寒

財施可哉。叢社秋深。

蟬葉を抱き、財利は、牝雞卵を護す。儒門の

法苑霜寒。声色寒蟬抱葉。財利牝雞護卵。儒門諸士。見吾如冤讎。見吾如土塊。亦宜哉。

諸士、吾を見ること冤讎の如し、吾を見ること土塊の如くす。亦た、宜なるかな。豈に、特に、儒士の妬忌のみならん。

豈特儒士妬忌而已哉。若夫到法城有變寬王受屈。吾輩有何力保任之。有何策。支拄之。寔可

若し、夫れ、法城變有って、寬王屈を受くるに到らば、吾輩、何の力有ってか、之を保任せん。何の策有ってか、之を支拄せん。寔に

慎恐之時也。近來処有善巧慈愍宗匠。為勸勵鞭策。間有

近來、処々、善功慈愍の宗匠有り。為に、勸勵、鞭策す。間々、探道の上士有って、法苑、將に、少しく春を回らさんとす。願く

探道上士。法苑將少回春。願乘此嘉運。各宜憤起精神。常恐。青灯

は、此の嘉運に乗じて、各の宜しく、精神を憤起すべし。

欲滅。暫增光輝者歟。蓋夫道得人則行。人得道則尊。譬如竜泉大阿

常に恐る。青灯滅せんと欲して、暫く、光輝を増すは、蓋し、夫れ、道人を得るときは、則ち行なわれ、人、道を得るときは、則ち尊

寒光照胆腑冷焰透宝匣。不得其人。則無施斬蛟用。不逢其才。則無發

し。譬えば、竜泉大阿の寒光、胆腑を照し、冷焰、宝匣を透るが如し。其の人を得ざるときは、則ち斬蛟の用を施すこと無く、其の才に逢わざるときは、則ち截鉄の能を発すること

無し。

婦姑 よめとしゅうとめ

狼戾 おおかみのように心がねじけて道理にもとること。

婢妾 下女やめかけ

妬害 やきもちをやく。ねたみにくみ。

胡為 どうして（疑問、反語の助字）

真乗 真実の教え。仏の正法。

浮図 寺のこと。

寛厚 心がけが大きくて親切なこと。

恃 たよりにしていること。

耽著 ふけり執着する。

薄技 取るに足りない技芸。小技に同じ。

輕肥 輕裘肥馬から出た語。ぜいたくな身なり、生活。

叢社 叢林に同じ。大きな禅院、教団のこと。

法苑 仏国土。

冤讎 うらみ。あだ。

妬忌 ねたみいむ。妬は顔色に現われる。忌は行動にあらわれる。

鞭策 むちうちをげますこと。

竜泉大阿 昔の名劍の名。

寒光 劍等によるさむざむとした光。

胆腑 きも、はらわた。見えないようむところ。

冷焰 さえかかったともしび。

宝匣 宝のはこ。

斬蛟の用 竜の一種、みずちをたちきるようなはたらき。すぐれたすばらしいはたらき。

東漢永平間。仏光始照震旦。五嶽道士費叔牙猪善信輩。各挾左道。

以欲拒。当此時。騰蘭帶十力余烈。有二九神变。如象王臨羊群。諸道怖伏。遂剌染矣。

唐代宗大曆間道士史華

設刃梯。訟官欲辱我門。時沙門崇慧不劳力而挫之。唐憲宗元和間。刑

部侍郎韓愈作仏骨表以殺仏。終貶潮州。大顛

通禪師談笑降之。魏太平真君時。崔浩從夷大

武。大誅沙門。沙門曇始有神異。佩刀折暴虎

伏。大武驚悔謝帰仰。

東漢の永平の間、仏光始めて震旦を照す。五嶽の道士、費叔牙、猪善信が輩、各の左道を挾んで、以って拒まんと欲す。此の時に当

て、騰蘭、十力の余烈を帯び、二九の神变有り。象王の羊群に臨むが如し。諸道怖伏して、遂に剌染す。

唐の代宗、大曆の間、道士史華、刃梯を設

け、官に訟え、我が門を辱しめんと欲す。時に、沙門崇慧、力を勞せずして之を挫く。

唐の憲宗、元和の間、刑部侍郎、韓愈、仏骨

の表を作って、以って仏を殺して、終に潮州に貶せらる。大顛通禪師、談笑して之を降す。

魏の太平、真君の時、崔浩、大武に従夷して

大いに沙門を誅す。沙門、曇始、神異有り。佩刀折れ、暴虎伏す。大武驚いて悔謝し、

帰仰す。後に、浩は五族を夷らぐ。正平十四年、大武も、亦た弑せらる。

後浩夷五族。正平十四年。大武亦見弑矣。宋嘉祐間。歐陽修李泰伯

宋の嘉祐の間、歐陽修、李泰伯等、韓刑部が排仏を壯とす。明教大師、契嵩『輔教編』を作つて、諸儒嘆伏す。

等壯韓刑部排仏。明教大師契嵩作輔教編。諸儒嘆伏。宋淳熙間。朱晦菴博涉獵積典。竊偷以為己力。明正統間隆空谷作尚直編以正之。博達才。至正論。寔可貴。晦菴恐無所藏身。從上諸聖。乘願輪來。捨身財。忘性命。凌苦寒艱辛。忍煩暑患難。終徹仏理淵源。心量容江海不為狹。智鑑竝日月無慚。德高戒清。鎮護法城。覆蔭後昆。寔為万世龜鏡者也。近世其有誰哉。

宋の淳熙の間、朱晦菴、博く積典を涉獵し、竊かに偷んで、以つて己れが力と為す。明の正統の間、隆空谷『尚直編』を作つて、以つて之を正す。博達之才、至正の論、寔に貴ぶ可し。晦菴、恐らくは、身を藏する所無し。

貴。晦菴恐無所藏身。從上諸聖。乘願輪來。捨身財。忘性命。凌苦寒艱辛。忍煩暑患難。終徹仏理淵源。心量容江海不為狹。智鑑竝日月無慚。德高戒清。鎮護法城。覆蔭後昆。寔為万世龜鏡者也。近世其有誰哉。

從上諸聖。乘願輪來。捨身財。忘性命。凌苦寒艱辛。忍煩暑患難。終徹仏理淵源。心量容江海不為狹。智鑑竝日月無慚。德高戒清。鎮護法城。覆蔭後昆。寔為万世龜鏡者也。近世其有誰哉。

從上諸聖。乘願輪來。捨身財。忘性命。凌苦寒艱辛。忍煩暑患難。終徹仏理淵源。心量容江海不為狹。智鑑竝日月無慚。德高戒清。鎮護法城。覆蔭後昆。寔為万世龜鏡者也。近世其有誰哉。

從上諸聖。乘願輪來。捨身財。忘性命。凌苦寒艱辛。忍煩暑患難。終徹仏理淵源。心量容江海不為狹。智鑑竝日月無慚。德高戒清。鎮護法城。覆蔭後昆。寔為万世龜鏡者也。近世其有誰哉。

從上諸聖。乘願輪來。捨身財。忘性命。凌苦寒艱辛。忍煩暑患難。終徹仏理淵源。心量容江海不為狹。智鑑竝日月無慚。德高戒清。鎮護法城。覆蔭後昆。寔為万世龜鏡者也。近世其有誰哉。

從上諸聖。乘願輪來。捨身財。忘性命。凌苦寒艱辛。忍煩暑患難。終徹仏理淵源。心量容江海不為狹。智鑑竝日月無慚。德高戒清。鎮護法城。覆蔭後昆。寔為万世龜鏡者也。近世其有誰哉。

從上諸聖。乘願輪來。捨身財。忘性命。凌苦寒艱辛。忍煩暑患難。終徹仏理淵源。心量容江海不為狹。智鑑竝日月無慚。德高戒清。鎮護法城。覆蔭後昆。寔為万世龜鏡者也。近世其有誰哉。

從上諸聖。乘願輪來。捨身財。忘性命。凌苦寒艱辛。忍煩暑患難。終徹仏理淵源。心量容江海不為狹。智鑑竝日月無慚。德高戒清。鎮護法城。覆蔭後昆。寔為万世龜鏡者也。近世其有誰哉。

從上諸聖。乘願輪來。捨身財。忘性命。凌苦寒艱辛。忍煩暑患難。終徹仏理淵源。心量容江海不為狹。智鑑竝日月無慚。德高戒清。鎮護法城。覆蔭後昆。寔為万世龜鏡者也。近世其有誰哉。

若夫儒人道士及神家者流。共計勦力。來屈辱

若し、夫れ、儒人、道士、及び、神家の者流、共に計り、力を勦せ、來つて吾が門を屈

吾門。如凍雀向鵬爪病狗触獅牙。如何張陣子。寔可恐法門衰敗。縉田荒蕪。胡為其到此極也。今其搜索真正參禪衲子。一掃四海。一箇亦無。往往耽嚼華藻文章。吟玩無賴詩偈。似狂狗咬古塊。或有一般魔党。教壞多少好人。云。此事初無許多般事。自性本來清淨。非假悟而後喫飯者。非待悟而後打厠者。從頭円明。從頭自在。呼鴉不為鷺。呼火不為水。喫飯喫茶無事過日。名之為真正衲子矣。嗟。是何死見解。是何惡種族哉。認賊為子。何曾夢知衲衣下事哉。似則似。如何脱体似展長鎗剥爪皮。

辱するは、凍雀の鵬爪に向い、病狗の獅牙に触るるが如し。如何んが陣子を張らん。寔に恐るべきは、法門の衰敗、縉田の荒蕪、胡為れど、其れ此の極に到るなり。今、其れ真正の參禪の衲子を搜索するに、四海を一掃して、一箇も亦た無し。往々、華藻の文章を耽嚼し、無賴の詩偈を吟玩すること、狂狗の古塊を咬むに似たり。或は一般の魔党有り。多少の好人を教壞して云く、「此の事、初めより許多般の事無し。自性本來清淨、悟を仮りて後、飯を喫す者に非ず。悟を待つて後、厠を打する者に非ず。從頭円明、從頭自在、鴉を呼んで鷺と為さず。火を呼んで水と為さず。喫飯、喫茶無事にして日を過す。之を名づけて真正の衲子と為す。」と。嗟、是れ何んの死見解ぞ。是れ何の惡種族ぞや。賊を認めて子と為す。何ぞ、曾つて夢にも衲衣下の事を知らんや。似ることは則ち似たり。如何んせん。脱体長鎗を展べて、爪皮を剥すに似たり。



有般底云。生死悠遠。

業障深重。日誦幾品經

卷。礼幾箇仏陀。彼亦

行。此亦行。行行而老

死。即休而已。是又何

閑妄想哉。若恁麼而即

可。祖師自西天送二三

行書足而已。豈凌十万

里鯨波伝箇見性法哉。

嗚呼。見性如塗毒鼓。

見性如火聚。豈庸人

情夫能事哉。有般底云。

仏法自淺到深。自近到

遠者也。聚許多話頭語

言。次第授与之云。解

此了解彼。解彼了又解

此。令学人種種妄覺邪

解。宛如解謎人。是又

何邪魔部類乎。蠱害仏

法。殘賊祖門者。是等

惡知識也。豈謂特林氏

輩哉。

有般底は云く、「生死悠遠、業障深重、日に幾

ばく品の経巻を誦し、幾箇の仏陀を礼し、彼

も亦た行じ、此れも亦た行じ、行じ行じて、

老死して即ち休せんのみ」と。是れ又、何の

閑妄想ぞや。若し、任麼にして、即ち可なら

ば、祖師、西天より二三行の書を送って足る

のみ。豈に、十万里の鯨波を凌いで、箇の見

性の法を伝えんや。

嗚呼、見性は、塗毒鼓の如く、見性は、大火

聚の如し。豈に、庸人、情夫の能事ならん

や。有般底は云く、「仏法は浅自り深に到り、

近自り遠に到る者なり」と。許多の話題、語言

を聚めて、次第に之を授与して云く、「此れを

解し了って、彼を解せよ。彼を解し了って、

又、此を解せよ」と。学人をして、種々に妄

覺邪解せしむ。宛も、謎を解く人の如し。是

れ、又、何の邪魔の部類ぞや。仏法を蠱害

し、祖門を殘賊する者は、是れ等の惡知識な

り。豈に、特に、林氏が輩のみ謂わんや。

東漢の永平 時代名。仏法東漸の時代。

費叔牙・猪瞞信 (人名) 『仏祖統紀』『仏祖歴代通載』には、褚善信、

費叔才とある。大正49・四〇七b-c 三二九b-c

「釈道比較梵經。(中略) 時道士等將真元五訣符録等五百九卷、

茅成子等二十七家二百三十五卷。通計七百四十八卷。置之壇上。

褚費之徒焚香呪已。遂使火之。諸子道書皆滅灰燼。褚費二人

自感而死。」

「及梵仏經。光明五色上徹天表。烈火既息經像儼然。摩騰踊

身飛空現諸神變。法蘭出大梵音。宣明仏法。天雨宝華。大

衆欣説。太伝張衍謂道士曰。卿等無驗宜從仏教。」

騰蘭 摩騰・法蘭のこと。

史華 「九年。道士史華以術得幸。因請立刀梯与沙門角法。有

旨阿街選僧剋日校勝負。沙門崇惠者。不知何許人。常誦首

楞嚴呪。表請挫之。帝率百僚臨觀。史華履刀梯而上。命惠

登之。惠躡刀而昇。往復無傷。惠拳勝命聚薪于庭。拳烈焰。

惠入火聚呼史華令入。華漸汗不敢正視。帝大悦而罷。賜

崇惠号護国三蔵。後不知終」(大正49・六〇四c)

崇惠 唐代中期の人。牛頭宗。径山法欽の法嗣。禅觀・密教を修す。

韓愈 (七六八-八二四) 唐代中期の政治家・思想家・文章家。二十四

才で官吏試験の進士科合格。八一九年憲宗皇帝が仏骨を宮中に入

れようとしたとき、「仏骨を論ずる表」を作り阻止しようとして

天子の激怒をかい朝州刺史に下された。「刑部侍郎韓愈上表曰。

上古無<sub>レ</sub>仏而治漢明仏法至其後乱亡。晋魏以下年代尤促。梁武奉<sub>レ</sub>之為<sub>二</sub>候景<sub>一</sub>所逼餓<sub>二</sub>死台城<sub>一</sub>。事仏求<sub>レ</sub>福乃得<sub>レ</sub>禍。仏本夷狄之人。口不<sub>レ</sub>道<sub>二</sub>先王之法言<sub>一</sub>。身不<sub>レ</sub>服<sub>二</sub>先王之法服<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>君臣之義父子之情<sub>一</sub>。況其身死已久。枯朽之骨凶穢之余。豈宜<sub>二</sub>以入<sub>二</sub>宮禁<sub>一</sub>。乞<sub>二</sub>以此骨<sub>一</sub>付<sub>二</sub>之水火<sub>一</sub>。永絶<sub>二</sub>根本<sub>一</sub>。仏如有<sub>レ</sub>靈能作<sub>二</sub>禍福<sub>一</sub>。凡有<sub>二</sub>殃咎<sub>一</sub>宜<sub>二</sub>加<sub>二</sub>臣身<sub>一</sub>。表入帝大怒。將<sub>二</sub>抵<sub>二</sub>以<sub>一</sub>死。頼<sub>二</sub>裴度等勸<sub>二</sub>貶<sub>二</sub>潮州刺史<sub>一</sub>。(大正45・三八一c)

「韓愈至<sub>二</sub>潮州<sub>一</sub>。聞<sub>二</sub>大顛師之名<sub>一</sub>。請入<sub>レ</sub>郡問<sub>レ</sub>道。留旬日。後祀<sub>二</sub>神至<sub>二</sub>海上<sub>一</sub>登<sub>二</sub>靈山<sub>一</sub>造<sub>二</sub>其居<sub>一</sub>。問<sub>レ</sub>師如何是道。師良久。愈罔<sub>レ</sub>措」(T49・三八二a) 思想は当時出世間的態度をとって政權に対抗する仏教や無政府的な自立生活にあこがれる道教を排撃し、儒教によった仁義を基調とする日常倫理と国家秩序の必要を説いた。

大顛通禪師 法通(七三二〜八二四) 石頭希遷の法嗣。「大顛仏光」「大顛良久機縁」、法通と韓愈との故事がある。

崔皓(三八一〜四五〇) 北魏の政治家。清河の人。字は伯淵。明元帝、太武帝に仕え、侍中撫軍大將軍となった。

「崔皓嘗見<sub>二</sub>妻郭氏誦<sub>二</sub>金剛經<sub>一</sub>。乃奪<sub>レ</sub>之火焚棄<sub>レ</sub>廁。初崔皓為魏司徒。自恃<sub>二</sub>才略<sub>一</sub>。及<sub>二</sub>魏主所<sub>二</sub>寵任<sub>一</sub>專制<sub>二</sub>朝權<sub>一</sub>。太武以<sub>レ</sub>皓監<sub>二</sub>秘書<sub>一</sub>。(中略)帝大怒。使<sub>二</sub>有司按<sub>二</sub>皓罪狀<sub>一</sub>。皓惶惑不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>對。執<sub>レ</sub>皓檻<sub>レ</sub>車置<sub>二</sub>于城南道側<sub>一</sub>。使<sub>二</sub>衛士路人行<sub>二</sub>漫<sub>二</sub>其面<sub>一</sub>。呼聲嗷々徹<sub>二</sub>于道<sub>一</sub>。曰。此吾投<sub>レ</sub>經溺<sub>レ</sub>像之報也。凌遲而死。時年七十矣。崔寇<sub>二</sub>二家悉夷<sub>二</sub>五旗<sub>一</sub>」(大正49・五三八a)

道士、寇謙之と太武帝につかえ、道教を国教として仏教を排斥した。後に、北賊は漢人より劣るという意識で国史を作ったため、怒りをもって殺害された。

弑 臣や子が主君や親を殺す。身分の下の方が上のもを殺すこと。

歐陽修(一〇〇七〜一〇七二) 北宋の文学者・史学者。唐宋八大家の一人。号は醉翁・六一居士、諡は文忠。字は永叔。天聖八年(一〇三〇) 首席で士進に及第し、地方の刺史を歴任し、四十八才のとき翰林学士に召され、嘉祐五年(一〇六〇) 樞密副使、翌年、参知政事となり仁宗を補佐したが、大安石の青苗法施行に反対し、熙寧四年に退官し、翌年六十六才で没した。韓退之(韓愈)の『原道』を読んで共鳴し、『本論』を著わして仏教を批判し、また、『新唐書』『五代史』の編纂にあたっても排仏を強調している。しかし、晩年には、心気一転して、熱烈な仏教信者となった。

李泰伯(一〇〇九〜一〇五九) 字は、泰伯。李觀という。

皇祐(一〇四九〜一〇五四) の初年、范仲淹の推薦により、太学助教に試みられ、嘉祐中に召されて、海門主簿、大学説書にすった。文をよくして、歐陽修などに次ぐものがある。

韓刑部 韓愈のこと。

朱晦菴 朱子、朱熹のこと。号は晦庵、晦翁、紫陽、諡は文。字は元晦、仲晦。南宗の儒学者。宋学の大成者。紹興十八年(一一四八) 進士となり官に就くが、のち退いて二十年の間、学に専心し、李

延年、周濂溪に学を受け、新しい儒学を大成した。若い頃から仏教に関心を持ち、大慧宗杲や偽山靈祐、永明延寿などの著を読み、經典も広く研究し、参禅もしていたと言われており、学説には、仏教の影響が強い。しかし、仏教に対する批判も厳しく、あらゆる面から論難し、特に、仏教の唯心説批判に力を尽した。願輪 菩薩の身が常に自己の誓願に転ぜられることを輪に喩えた語。龜鏡 龜は吉凶を占うもの。鏡は物を照らすもの。ともに手本とすべきものである。参考とするもの。

者流 「ヤカラ」

許多般 「イクバクハン」、多くの種類。

打廁 廁に行く。

従頭 はじめより。

賊を認めて子と為す にせものを掴んで本物と思うこと。妄心を認めて

真心と誤ることのたとえ。

衲衣下の事 禅僧が修行の目的とする生死究明の一大事。

脱体 過不足なくそのまま。

有般底 「アルツラテイ」。ある種の人々。あるたぐいの者。

鯨波 大波のこと。鯨濤ともいう。

予常為之胆冷牙戦。謹 予、常に之が為に、胆冷え、牙戦く。謹しん  
白参玄上士。莫堕如上 で、参玄の上士に白す。如上の魔罣に墮する  
魔罣。参一句真正話頭。 こと莫かれ。一句真正の話頭に参ぜよ。

僧問趙州、狗子還有仏性麼也否。州曰無。是即碎魔罣之宝輪。截情解之利刀也。但單單拳擡。州曰無。閑処靜処。行往坐臥。豎拳橫拳。出息入息。寤時寐時。束為一則無字。單單拳擡。其始進修時。妄念紛飛。邪境競起。鬧鬧騷騷。如入亂軍裏。如陪歌舞筵。心猿馳散。意馬乱踏。如逢劣平日者。此時不打退鼓。單單進修。則妄情力尽。邪解技窮。如落万丈鬼窟。如入千重鉄圈。進不得退不得。只四面暗昏昏地。而無所著手脚。此時不生恐怖。單單拳擡。忽然十方法界如一片層氷盤。如一團瑠璃顆。理尽詞窮。

僧、趙州に問う。「狗子に還つて仏性有りや、也た否や。」州曰く、「無」と是れ即ち、魔罣を碎するの宝輪、情解を截るの利刀なり。但だ、單々に拳擡せよ。州曰く、「無」と。閑処、靜処、行往坐臥、豎に拳し、横に拳して、出息、入息、寤時、寐時、束ねて一則の無の字と為して、單々に拳擡せよ。其の始めて進修する時は、妄念紛飛し、邪境競い起きて、鬧々、騷々、乱軍の裏に入るが如く、歌舞の筵に陪するが如く、心猿馳散し、意馬乱踏して、遙かに、平日に劣る者の如し。此の時、退鼓を打たず。單々に進修せば、則ち、妄情の力尽き、邪解の技窮まつて、万丈の鬼窟に落ちるが如く、千重の鉄圈に入るが如く、進むことを得ず。退くことを得ず。只だ、四面暗昏昏地にして、手脚を著する所無し。此の時、恐怖を生ぜず。單々に拳擡せば、忽然として、十方法界、一片の層氷盤の如く、一團の瑠璃顆の如くにして、理尽き、詞窮まつて、心行所滅せん。  
此の時、情解を生ぜず。転た悟れば、転た拳せよ。転た了ぜば、転た参ぜよ。爆然として

心行所滅。此時不生情解。転悟転拳。転了転

参。爆然和拳起底心。

一時打失。有絶後再蘇底大歡喜。当此時。

仏祖無所挾手。緩緩

回首来。翠巖眉毛。乾峯三種。未了得。而

後見真正導師。把手一

笑。鵠林従上説話。只

是一场慚惶而已。

僧問趙州云々『無門関』第一則「趙州無字」の公案。

閑処静処 にぎやかなところと静かなところをいう。

暗昏昏 真暗の状態をいう。

翠巖の眉毛 『碧巖録』第八則

「拳、翠岩夏来示衆云、一夏以来為兄弟説話。看、翠岩眉毛

在麼。保福云作賊人心虚。長慶云生也。雲門云関。」

臨濟禅でいうところの「雲門の関」という公案。

乾峯の三種 乾峯二光三病。趙州乾峯の垂示。法身に三種の病、二種の

光があり、透脱すべきことを示したもの。この垂示は、雲門によつて拳示され、雲門三病・雲門両病として知られる。

「乾峯和尚上堂曰、法身有三三種病二種光。須是一透過始解穩

坐地。雲門出衆云、庵内人為甚麼、不知庵外事。峰呵呵大

笑。門云、猶是学人疑处。峰云、子是什麼心行。門云、也要和

尚相委悉。峰云、直須恁麼穩密始解穩坐地。門云、喏々。

(宗門葛藤集、上卷)

慚惶 はじおそれる。はづかしく思う。